日本心理学会第88回大会
SS-039：2024/09/08

未必の故意と傍観者

社会心理学の古典研究から考える
ハラスメントが生じる構造

公募シンポジウム：学術界におけるハラスメント対策の現状と課題を考える

〇工藤 大介（東北学院大学）
mail: dkudo@mail.tohoku-gakuin.ac.jp
URL: http://dicek.net/, 𝕏: @kddisk

自己紹介

- 工藤 大介（くどう だいすけ）
- 東北学院大学経営学部　准教授
- 日本心理学会若手の会　幹事
- 専門：社会心理学，リスク心理学，消費者行動
- mail: dkudo@mail.tohoku-gakuin.ac.jp
- URL: http://dicek.net/
- 𝕏: @kddisk

未必の故意とは

- 結果が発生するかも知れないということを知っており，しかも発生すればしてもよいという認容があるとき（団藤, 1984）

—— 団藤重光 (1984). 刑法綱要総論（改訂版） p.274. 創文社.

心理学界におけるセクハラ問題

- **これまでも心理学界ではハラスメントは行われ続けてきた**
- 2023年にも非常に残念なことだが，複数人の心理学者（心理士/師）たちによるセクハラが明らかとなった

（弁護士ドットコム, 2023）

- 認知・行動療法学会（2023）や日本心理学会（2023）では声明の発表や処分が行われた

弁護士ドットコム (2023). 心理学者3人セクハラで処分
日本認知・行動療法学会 (2023). セクシャルハラスメントに対する処分の報告.
日本心理学会 (2023). 弁護士ドットコムニュースの掲載記事について.

今現在はどうなった？

- 発覚当初はSNSでの炎上や，被害者への連帯の表明，加害者への非難など**一時的な盛り上がり**を見せた
- しかし今現在（2024年9月）は，この件について議論している人間はほとんどいなくなった
- もうすでに「過去のこと」や「他人事」として認識されてしまっていないか？
- **皆さんの怒りや問題意識はその程度だったのか？**

問題の根源を考える

- ハラスメントの加害者を責めるのは簡単だが，その前段階，つまり心理学界という環境に問題があるのではないかと考えるのが社会心理学者
- すなわち，ハラスメントの加害者を「生み出してしまった」**アカデミックな組織，学界それ自体が問題の根源**ではないのか？
- ここで一番最初のスライドで説明した「未必の故意」へとつながるわけです

未必の故意とハラスメント問題

- 心理学界におけるハラスメント問題は今回に限った話ではない
- 怒りと連帯を表明してきたのは，被害者に近しい人たちだけで，**じゃあ私たちは一体何をしてきたのか？**
- **「なるようにしかならん」「誰かが頑張ってくれるやろ」「対岸の火事」この程度の認識だったのではないだろうか？**

社会心理学の古典研究から考える

- **傍観者効果を考える**（Latane & Darley, 1968, 1970）
- 傍観者効果は1964年のキティ・ジェノヴィーズ事件が起点となり，実験的に検討がなされてきた
- 簡単に説明すると，「**助けや援助が必要な事態が生じているにもかかわらず，他者(= 傍観者)の存在を認知すると介入は抑制される**」効果

Latane, B., & Darley, J. M. (1968). Group inhibition of bystander intervention in emergencies. *Journal of Personality and Social Psychology*, *10(3)*, 215–221.

Latane, B. & Darley, J. M. (1970). The unresponsive bystander: Why doesn't he help? New York: Appleton-Century-Crofts.

傍観者効果についての解説①

- **傍観者効果** (Latane & Darley, 1968, 1970)

実験例：2名・3名・6名のグループで議論の最中に
1人が突然発作を起こす（実際はサクラ）

グループの人数	2分以内に援助した割合	援助までの平均時間
2名	85%	52秒
3名	62%	93秒
6名	31%	166秒

→ **6名グループのうち38%は行動を起こさなかった**

傍観者効果についての解説②

- **なぜ傍観者効果が生じるのか** (Latane & Darley, 1968, 1970)

1. 多元的無知

「他者が積極的に動かない ＝ 緊急を要しない」と誤認してしまう．言い換えると「他者が積極的に動かない ＝ 集団の多数派の意見」と錯覚してしまう

2. 責任の分散

他者に同調した方が，その事態に対する自身の責任，あるいは非難が分散されると考える

3. 評価への懸念

もし何かしら行動を起こした場合，結果に対して周囲からネガティブな評価を受けることを恐れてしまう

傍観者効果とハラスメント問題

- 大学なり学界なり，ハラスメント問題が生じると当事者とその周囲以外は，この**「傍観者」**と化している可能性がある
- 院生や若手は「上から睨まれて，就職や任期に影響したらマズい」と考える可能性
- 中堅やシニアになると「面倒な役割を回されると困るし，そもそも自分の安定した立場を脅かすようなものに触りたくない」と考える可能性

→ **「評価への懸念」による影響を受けている**

私たちも「共犯者」

- 評価への懸念などから「だんまり」を決め込んだ私たちの行動の集積の結果，ハラスメントが跋扈する環境を作り出してしまったのでは？
- ハラスメントを「許し」続けてきた，発表者の私を含めた，私たちも今回のハラスメント問題に対する**「共犯者」**なのではないか？
- **私たち自身も，これまでの行動の集積を「未必の故意」として非難されて当然なのではないか？**

さらに一歩踏み込むのであれば

- スター研究者や，業績のある研究者ならば何をやってもいい，何を言ってもいいという風潮があるのではないか？
- ハラスメントなんて「対岸の火事」と思い込んでいて，自分や自分の教え子，家族が「被害者」になる可能性を忘れてはいないか？
- 加害者にも前途や人権があると言うのであれば，加害者には適切な処分と，適切な「治療」や「カウンセリング」が必要なのではないか？

じゃあ救いはないのか？：少数派の力

- **少数派の影響を考える**（Nemeth, 1986）
- 少数派が影響をもつ状況

1.ある争点について一貫して異論を唱え続ける
2.問題の争点以外の属性については多数派と同じ
3.集団が外的な脅威にさらされるなど，多数派が自分たちの観点を根本から疑う状況下

Nemeth, C. J. (1986). Differential contributions of majority and minority influence. *Psychological Review*, *93(1)*, 23–32.

学界を少しずつ変えていくために

- 現在のハラスメント問題に関する心理学界隈は，「自分たちの観点を根本から疑う状況下」にあると言える
- その中で，少数派であろうと，声を上げ続ける必要がある
- だからこうやって，様々な活動に顕名で参加し，矢面に立っているわけです
- **変わるとしたら今しかない**

Take Home Message
贖罪の時

- 現在のハラスメント問題については，未必の故意による，私たち皆が作り出した社会的構造による問題
- 未必の故意や，現在の学界の構造は傍観者効果といった古典研究から説明できるのではないか
- 私たち皆が「共犯者」であることを忘れてはいけない
- **何度も言うが「変わるとしたら今しかない」**

Thank You!